

◇ 国 語

国 4－1～国 4－18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

次に、「^(二)パーソナライズする世界とパーソナライズされる世界」について見ていこう。まず「パーソナライズ」とは、パーソナル電話やパーソナルテレビの接頭辞である「パーソナル」（個人用）という言葉と、意味は重なりつつも異なる。

パーソナライズとは、ユーザー個人の興味・関心・行動に合わせて「最適化」されたサービスを手／提供する手法である。私たちはたとえ同じ機種スマートフォンを使用しても、そこにインストールされているアプリの種類や数はそれぞれ異なる。たとえ同じFacebookやTwitterなどのSNSを使っても、スクリーン上に現れる情報は異なる。同じスマートフォン・SNSを使っても、誰一人として同じ情報を見ていない。

インターネット系のメディアにおいて、パーソナライズには、ユーザー側が個人に最適なサービスを自ら入手して **a** 的にパーソナライズする側面と、メディア側から提供されるサービスによって **b** 的にパーソナライズされる側面がある。

前者のパーソナライズするとは、たとえば自ら選択したアプリをインストールすること、自ら選択したニュースサイトの新着・更新情報が自動的に配信されてくる「ニュースフィード」などを活用すること、Twitterで特定の人をフォローすることなどである。つまり、見たい情報だけを選択し、見たくない情報は排除することができる。

では、後者のパーソナライズされるとはどういうことか。Google、Yahoo!、Amazonに代表されるウェブサイト、FacebookやTwitterに代表されるSNSなどのIT企業は、私たちがこれらを使用することで、いつ誰と通話・通信をし、どこに行き、何を買ったかなどの個人情報やリレキを収集、蓄積、解析するアルゴリズムを実装している。このアルゴリズムによって、上記のウェブサイトやSNSは、私の行動を追いつけると同時に先回りして、さまざまな情報を送りつけてくる。私が情報へアクセスするのではなく、情報が私へアクセスしてくる。このようにして、スマートフォン・SNSはパーソナライズされる。

上記のようなIT企業のデータベースに蓄積された膨大な個人情報は、各種のマーケティングやサービスにも二次利用されている。物理的な都市空間の商品化のみならず、「情報空間の商品化」が進行しているのだ。

イーライ・パリサーは、インターネットの登場によって、メディアが、「ユーザーが誰で、なにを好み、なにを望むのかを判断する力を初めてもった」と述べている。ア、私についての膨大なデータを所有しているメディアの方が、私について、よりよく知っているかもしれない、「私が私のことを一番知っている」とは限らなくなった。

パーソナライズする世界では、ユーザーが情報の「選択と排除」の主導権を握り、コントロールしようとする。しかし、パーソナライズされる世界では、ユーザーが感知しないところで自動的に形成されるフィルターが、「見えない仕切り」として機能している。そして、そのフィルターを通過した情報のみが届けられる。

このことをメディアによって編成される「ひとり空間」という観点から、先述のウォークマン（注）と比較して考えてみよう。ウォークマンでは、外界から聴覚的シャドウ^①をすることで、自ら楽曲の「選択と排除」をし、能動的に「見えない仕切り」を立ち上げることができた。それに対し、スマートフォン・SNSによってパーソナライズされる世界では、情報の「選択と排除」の主導権がメディア側にあり、自ら情報を「選択と排除」しているように見えて、フィルターという「見えない仕切り」によって「選択と排除」をさせられている。私が「ひとり空間」を仕切るのではなく、メディアによって「ひとり空間」が仕切られるようになったのだ。

パーソナライズする世界とパーソナライズされる世界には以上のような違いがあるが、共通点もある。それは、見たい情報、信条に合うもの、好む人のことだけを知ること、居心地のよさを覚え、そうでないものを知ることを避ける傾向を助長するということだ。私に関係がないと思われる出来事や見慣れない世界を知ることを避けるような、「避知」とでも呼ぶべき態度を生むのである。

パリサーは、ひとりひとりがフィルターによって形成される泡^②に包まれて、都合の悪い情報からカクリ^③され、バラバラに孤立している状態を「フィルターバブル」と名づけた。フィルターバブルでは、私が関心のないこと、私に関係はないと思われる出来事を／が視界から排除し／され、「避知」という態度が形成されるのである。

インターネットソウ^④ウ期は、性別、年齢、居住地などの属性を明らかにすることなく、匿名でコミュニケーションできるこ

とが魅力とされてきた。しかし、SNSでは「匿名性」をもつ情報空間は縮小傾向にあり、第1章で紹介したルイス・ワースが、アーバンイズムの条件のひとつとして提示した「**c**性」も減退していった。SNSは、物理的な近接性を超えて不特定多数の他者とコミュニケーションする開放的な「**c**性」を備えてはいるが、趣味や信条の合う者同士が出会い、コミュニケーションする閉鎖的な「**d**性」も育むからである。

このように、SNSでは、趣味・嗜好を共有した**d**的な他者と居心地のよいコミュニケーションをはかり、浅く広い連帯感を感じとることができる。ただし、SNSを通じて他者とのコミュニケーションは情報空間に閉じられたものではなく、物理的な都市空間での出来事とも連動したものである。では、SNSが普及する以前と以後で、都市空間における他者との出会い方はどのように変化したといえるだろうか。

都市とは、出身地、階層、世代、趣味・嗜好などが異なる他者たちが集まってくる場であった。そのような異質な他者たちが集い、趣味・嗜好を共有する場として、都市には「たまり場」が形成されてきた。だが、それらのたまり場は、とりあえず足を運んでみる必要があったし、どのような人がいるかわからないという「遭遇可能性」に満ちた場所であった。このことは、都市のたまり場に足を運ぶからこそ得られる高揚感をもたらした。**イ**、そこで交遊を深めるには、足繁く通いつめ、顔を覚えてもらうなど、時間と手間を要した。

それに対し、SNSが普及して以降のたまり場は、あらかじめたまり場の様子を画像などで確認できるうえ、興味関心のあるキーワード検索に引っかけ、趣味・嗜好を共有した人びと同士が集まる「検索可能性」が高められた空間となっている。また従来の都市のたまり場において顔を覚えてもらうという慣習は、SNSを介した「フォロー」や告知の機能に取って代わられ、時間と手間のかからない効率のよい交遊ができるようになった。

このようにSNSのネットワークが都市空間に組み込まれることで、他者との出会い方は、「とりあえず」から「あらかじめ」へ変化し、他者との出会いの場は、「遭遇可能性」が高められた空間から「検索可能性」が高められた空間へ変化するようになった。SNSは、趣味・嗜好を共有した「ひとり」同士が効率よく出会うことのできる「マッチング精度」を上げたといえる。

その一方で、SNSは、そのネットワークの外側にいる人びととの出会いを難しくし、都市空間における遭遇可能性を減退させた。

スマートフォン・SNSの普及による検索可能性の高まりは、反動として、都市空間および情報空間における「検索不可能性の希求」という流れも生み出した。都市空間における検索不可能性とは、たとえば、私だけが知っているはずの近道や、ぐるなびや食べログのようなウェブサイトに掲載されていないはずのレストランなどのニッチな情報である。ただし、そのようなニッチな情報もソーシャル・メディアを介した可視化が進んでいる。

二〇一六年に流行した「ポケモンGO」は、スマートフォンのGPS機能の位置情報サービスをグシし、ゲーム性を取り入れながら、あらゆる場所の情報を、人びとが付与する思い出などの意味空間を含めて可視化し、地図化しようとする試みであった。このように、今日の情報社会では、検索不可能性を確保することが難しくなっているのである。

ダナ・ボイドは、アメリカの一〇代の若者によるソーシャル・メディアの利用に関する調査を通じて、「大人や同世代の他の人々に詮索されない空間が欲しいという願望」の存在に言及している。SNSが匿名性を減退させる傾向に向かったからといって、必ずしも人びとが、すべての人に開かれたオープンなコミュニケーションを望んでいるわけではないことは言うまでもない。

たとえば「Foursquare」では、どの範囲まで情報を公開するかという、プライバシーの制限のかけ方を「鍵をかける」と呼び、個室のメタファーが用いられている。ここでは、誰に何を伝え、何を隠すかが選択されている。SNSでは、日常生活のあらゆることを伝えているわけではなく、むしろ何を伝えていないかに注目することで見えてくることがある。

ケータイの時代にも複数台のケータイを所有し、複数のメールアドレスアカウントを保有するなど、対人関係に応じて、それらを「スイッチング」する（切り替える）者はいた。だが、SNSでは、個人が複数のアカウントを作成し、対人関係ごとに自分をスイッチングすることがより簡単になった。

地元の友人用アカウント、学校や職場の関係者用アカウント、匿名のアカウントなど、複数のアカウントごとにコミュニケーションの相手はもちろん、コミュニケーションの仕方をスイッチングする。個人のなかに複数の自分が並存している「個人の複

数性」が前景化するようになったのである。

先ほど紹介したボイドの調査によれば、情報 あ に長けた若者は、FacebookやTwitterなどのSNSごとに異なる作法と社会的文脈があることを理解したうえで、それら複数の異なる社会的文脈間をなめらかに移動するのだという。都市生活における移動には、交通機関などを介した物理的な移動のほかに、アカウントを使い分けながらのSNS間の移動という次元が加わるようになった。

ただし、個人が内包する複数性それ自体は、SNSというメディアによつてはじめてもたらされたものではない。西洋から輸入された概念である「個人 individual」は、否定の接頭辞 “in” と、「分けられた」という意味の “dividual” が組み合わされた言葉である。 ウ 、個人という言葉の語源には、「分けられない存在」という意味がある。

平野啓一郎は、“dividual” を「分けられる存在」という意味で、「分人」と呼んだ。分人とは、恋人、両親、学校・職場や趣味の仲間など、対人関係ごとのさまざまな自分のことを指す。dividualに着目することによって、複数の分人があること、すなわち個人のなかに複数性があることに光を当てたのだ。

平野によれば、分人とは他者との関係性において成立する、いや他者との関係性においてしか成立しない。それゆえ、分人は独立したものや不変のものでもなく、他者との関係が変われば、自ずと変化する流動的な状態にあるという。

対人関係ごとに複数の自分が存在するという個人の複数性それ自体は、SNSの普及以前から見られたことではある。

エ 、SNSの普及により、家・学校・職場以外に、共通の趣味・嗜好によるメディアを介した対人関係の数が増え、スイッチングの頻度が増すようになったのである。

（南後由和『ひとり空間の都市論』による。文章中の出典情報は省いた。）

注…ウォークマン…携帯用音楽プレーヤー。一九七九年にソニーが発売して人気を集めた。

問一 傍線部 A・B・C・D・E と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A リレキ

- ① ヒミツリに協議する
- ③ ハクリ多売で繁盛する
- ⑤ カンリとして登用される

- ② 債務をリコウする
- ④ リチ的な性格

1

B シヤダン

- ① 寺に財産をキシヤする
- ③ シヤテイ距離に入る
- ⑤ 磁気をシヤヘイする容器

- ② シヤフツして消毒する
- ④ シヤテイを連れて歩く

2

C カクリ

- ① チカク変動による地震
- ③ 敵からシカクが送り込まれる
- ⑤ 砂上のロウカク

- ② 外来生物をホカクする
- ④ オウカク膜が収縮する

3

D ソウソウ

- ① 世界有数のコクソウ地帯
- ③ 滋養キョウソウに効果がある
- ⑤ 在庫イツソウの大セール

- ② 国の将来をソウケンに担う
- ④ ソウゾウ性を発揮する

4

E クシ

- ① 四輪クドウの自動車
- ③ コック勉励して働く
- ⑤ 費用をクメンする

- ② 神にクモツを捧げる
- ④ 太古から変わらぬクオンの姿

5

問二 空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ に入る最も適当なものを次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア	①よもや	②あたかも	③もはや	④あいにく	⑤むろん	6
イ	①したがって	②ただし	③なぜなら	④たとえば	⑤つまり	7
ウ	①つまり	②というのも	③一方	④ところが	⑤しかも	8
エ	①すなわち	②このように	③だが	④それゆえ	⑤もつとも	9

問三 空欄 a b c d に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の各群の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選べ。

a b

① 選択－排除
④ 排除－選択

② 能動－受動
⑤ 受動－能動

③ 個人－分人
⑥ 分人－個人

10

c d

① 異質－同質
④ 同質－異質

② 自己－他者
⑤ 他者－自己

③ 遭遇可能－検索可能
⑥ 検索可能－遭遇可能

11

問四 あ の部分に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

12

① イデオロギー

② アナロジー

③ リテラシー

④ ヒエラルキー

⑤ ボキャブラリー

問五 傍線部（二）「パーソナライズする世界とパーソナライズされる世界」について、筆者はこの二つがどのように違うと述べているか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

① 「パーソナライズする世界」では、情報を「選択と排除」する主導権がユーザーにあるため、欲しい情報を確実に入手できるが、「パーソナライズされる世界」では、メディア側にその主導権があるため、ユーザーは欲しい情報を得られなかったり、欲しくない情報を送りつけられたりする。

② 「パーソナライズする世界」では、情報を「選択と排除」する主導権はユーザーにあるが、一方で「パーソナライズされる世界」では、IT企業が収集した個人情報から自動的に形成されたフィルターを通過した情報だけが届くため、ユーザーは「選択と排除」をさせられている状態である。

③ 「パーソナライズする世界」では、情報を「選択と排除」する主導権が人間にあるため、情報の選択や排除にミスが生じやすいが、「パーソナライズされる世界」では、IT企業のサービスを利用した際の個人情報にAIによって解析されるため、自分の好みにより近い情報を入手できる。

④ 「パーソナライズする世界」では、IT企業が収集した個人情報をアルゴリズムによって解析し、ユーザー個人に最適化した情報を届けるが、一方で「パーソナライズされる世界」では、ユーザーが情報を逐一「選択と排除」し、自分に最適化されるように設定しなくてはならない。

問六 傍線部（二）「SNSを通じた他者とのコミュニケーション」について、筆者はSNS普及の前後で都市空間においてどのような変化が生じたと述べているか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

① 異質な者たちが集まる都市の「たまり場」では、どのような人がいるかわからないため、趣味・嗜好を共有しているかどうか時間と手間をかけて確認してから出かける必要があったが、SNSの普及以降は「検索可能性」が高まり、趣味・嗜好を共有する「ひとり」同士が効率よく出会うことができるようになった。

②異質な者たちが集まる都市の「たまり場」は、誰に遭遇できるかわからない高揚感がある一方、交遊を深めるには時間と手間のかかる場所だったため、SNSが普及したあとは、人びとの「たまり場」は「検索可能性」の高い情報空間へ完全に移行し、物理的な都市空間における「たまり場」はその姿を消した。

③以前の都市の「たまり場」では、誰に遭遇できるかわからないものの、多くの人数が集まることによって広く浅い連帯感を感じることができたが、SNSが普及したあとは趣味・嗜好を共有した人びとのみが集まる空間となり、「たまり場」に集まる人びとはより凝集した狭くて深い連帯感を感じるようになった。

④異質な者たちが集まる都市の「たまり場」は、誰に遭遇できるかわからない高揚感がある一方、交遊を深めるには時間と手間のかかる場所だったが、SNSの普及以降、あらかじめ検索によって趣味・嗜好の共有を了解している人びと同士が集まる空間となり、マッチングしない人びととの出会いが難しくなった。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

15

①ウオークマンで音楽を聴くことは、自分で楽曲を選び、外界との間に「見えない仕切り」を立ち上げて、「ひとり空間」を作ることであった。

②自分に関係がない出来事や見慣れない世界を知ることを避けるという「避知」の傾向は、パーソナライズされる世界に特有の態度である。

③SNSで匿名性をもつ情報空間が縮小していることは、人びとがすべての人に開かれたコミュニケーションを望むようになったことを表している。

④複数のアカウントを作成し、対人関係ごとの相手によってそれらを使い分ける「個人の複数化」は、SNS普及後に初めて生まれた現象である。

⑤平野啓一郎は、他者との関係性においてしか成立しない「分人」こそが、それ以上分けられない“individual”、すなわち「個人」だと示した。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

十七歳を迎えた一八八九年には、父親の死去と、樋口一葉にとつてもうひとつの忘れられない大きな出来事として、渋谷三郎との婚約の破棄がありました。

渋谷三郎は、一葉の父母が江戸へ駆け落ちしたおりに頼った真下専之丞の庶子に生まれた子で、真下の孫にあたります。一葉は青海学校を退学して、親の知人の妻のもとに和裁の稽古に通いましたが、そこで渋谷三郎に出会いました。一葉が十三歳、三郎は十八歳のときでした。

その後、三郎は樋口家に入入りして、一葉とも隔てなく話をし、邦子と三人で寄席にいたりもしております。父の則義は、三郎を一葉の望みと希望し、ふたりの結婚話はすでにまとまったものと思つて亡くなりました。

則義は、亡くなる直前に仲間たちと荷車請負業組合を設立しましたが、その事業に失敗し、多額の出資金を失っております。ここに樋口家が急速にキウハクしていった原因があつたわけですが、その父の死後、一葉は戸主として一家を支えてゆかねばなりませんでした。

三郎は、父の没後に「利欲にかゝはりたること」をいだし、母のたきが非常に立腹して、この一葉と三郎の結婚話は破談となりました（日記「しのふくさ」一八九二年九月一日）。一葉は「我もとより是れに心の引かるゝにも非ず「自分はもともこの結婚話に心を引かれていたわけではない」と、平静をよそおっていますが、内心には大きな衝撃をうけたものと思われまゝ。

渋谷三郎は東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業し、官僚の登竜門である高等文官試験に合格して、一八九一年に新潟三条区裁判所に判事補として赴任しました。翌年には検事に昇進して月俸五十円という身分となり、その年の八月二十二日、突然一葉のもとへ来訪しました。

その日の日記に一葉は、三郎の言葉として「自分は以前にあなたの家がこれほど窮乏しているとは思わず、もつと裕福であると思つて無理なことをいひだしましたが、今からすればとても気の毒なことをしたと心苦しく思つています」ということを語

ったと記しています。三郎は、樋口家がこれほど困っているとは思わず、出世のためにもつとエンジョしてもらえんと思つていたのでしよう。

みずからの生活が安定した三郎は、このとき改めて一葉へ求婚するために来訪したようでした。が、知人を介して母のたきにその意向を聞いたところ、プライドの高い母はそれをきっぱりと断つたといひます。しかし、一葉にはさまざまな思ひがコウサクしたことでしょう。

渋谷三郎はその後、真下専之丞のもうひとりの庶子である阪本勝之丞の養子となり、新潟、水戸、東京地裁判事、東京控訴院判事を歴任し、一八九七年にはドイツへ留学しています。帰国後には法制局参事官、秋田県知事、山梨県知事、早稲田大学法学部長および同理事を歴任し、幅広くカツヤクしました。

よく知られているように、病氣のため亡くなった一葉のショウガイは非常に短いものでした。また発表した作品の数は、未完の作品を含めても二十二篇とさほど多いものではありません。それらを通読したとき、まず気づかされることは、筒井筒の恋——幼なじみの男女の恋のモチーフが基調となつた作品がきわめて多いということです。

筒井筒の恋のモチーフは、いうまでもなく『伊勢物語』第二十三段によつたものです。筒型の井戸のもとで遊んだ幼なじみが大人になつて、互いに意識して恥ずかしく思つておりましたが、男は女に「筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」「筒井戸の井筒で背丈をはかつた私の背も、あなたと会わないうちにきつとうんと高くなつていたでしよう」という歌を送ると、女の返歌に「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」「あなたと長さを比べあつた私の振分髪も、肩を過ぎるほどになり、いったいあなたのためでなく、誰のためにこの髪を結い上げましょう」とあつて、ふたりは願ひどおりに結婚したというものです。

一葉の作品は、先に紹介した第一作の「闇桜」から、代表作の「ア」にいたるまで、『伊勢物語』の男女とは逆に、幼なじみの少年少女がその恋の破局にいたるという物語が中心になっております。おそらくこれには実体験が響いていると思われ、一葉にとっては渋谷三郎との婚約解消が、いかに大きく心に残る傷だったかということ想像させます。

「開桜」に次いで発表された「別れ霜」も、やはり幼なじみの許嫁による悲恋^aが描かれます。呉服商の松沢と新田の両家は、もとは同じ家の本家と分家で、代々きわめて親密な関係にありました。が、新田家に入婿した運平は非常に野心家で、本家の松沢家を破産へ追い込んでしまいます。松沢家の一人息子芳之助（二十歳）と新田家の一人娘お高（十六歳）は許嫁でしたが、お高の父である運平によつてその仲はひき裂かれ、いまでは芳之助は零落して人力車の車夫をしています。

雪のある日、お高はたまたま芳之助の人力車に乗り合わせることにになり、東京の街中を乗りまわし、とある料理屋の座敷に芳之助を招き入れます。芳之助を熱く慕いつづけるお高の真情に、芳之助のそれまでの怒りは鎮められますが、将来に望みを抱けないふたりは心中を覚悟することになります。

幼なじみに裏切られて人力車の車夫に転落するという設定は、これも代表作の「十三夜」の録之助と同じです。「十三夜」のヒロインお関は「十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に」、ゆくゆくは幼なじみの録之助と一緒になるものと思っていました。が、お関は器量好みの奏任官の原田勇に望まれて嫁いでしまいます。その後、録之助は呑んでくれて、財産を失い、車夫にまで転落するのです。

また「別れ霜」の松沢家と新田家の対立は、「ア」における、表町組と横町組という子どもたちのグループの対立を連想させます。美登利と信如という対立する両グループの男女が惹かれ合うという構成は、そのままシェークスピアの「ロミオとジュリエット」にも通じるものがあります。

「花ごもり」においては瀬川与之助が、両親を亡くして八歳のときから瀬川家に養われているお新と、ほとんど許嫁の關係にあります。が、与之助の母は有名な高官の娘が与之助との結婚を望むと、巧妙に画策してその縁談を熱心に推し進め、お新を家から追い出してしまいます。

「やみ夜」には、みずから身を引くお新とは、まったく対照的に激情にかられるヒロインお蘭の姿が描き出されます。お蘭は、かつて許嫁でしたが自分を裏切った衆議院議員波崎^{なみぎきたたよう}漂を決して許すことができません。波崎はお蘭の父にさんざん恩を受けたにかかわらず、父が非業の死を遂げると、寄りつかなくなっていました。お蘭は波崎の乗る人力車にはねられて負傷した漂

泊者の高木直次郎を介抱し、直次郎に波崎の殺害を頼みます。

幼なじみの少年少女の恋の物語は、このほかにも「五月雨」「経づくえ」「ゆく雲」「うつせみ」など、直接的に描かれなくても、一葉作品の発想の根底において大きな役割を果たしています。一葉はのちに小説の師である半井桃水なからいとうすいに激しい恋情を抱くこととなりますが、それにも劣らず、この十七歳での渋谷三郎との婚約破棄という出来事は精神的に大きな衝撃だったといっています。

遊女となることを運命づけられた「ア」のヒロイン美登利は、「あゝ、厭いとや厭いとや、大人に成るは厭いとやな事、何故このやうに年をば取る」といいます。美登利の運命を知る遊び仲間の少年は、「十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ」という、当時の流行した歌の文句を口ずさみますが、十七歳で父に死なれて人生の荒波に乗り出さなければならなかった一葉にとって、まさにこれは実感のこもった言葉だったでしょう。

(千葉俊二『作家たちの17歳』より)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A キュウハク

- ① 悪事がハクジツの下に晒される
- ② ハクヒョウを踏む思いで臨む
- ③ 花火大会はハクリヨクがあった
- ④ 彼は大変ハクシキな人物だ
- ⑤ あらゆる種類のセンバクが港に停泊している

16

B エンジョ

- ① 日本海のエンガン部
- ② クラスでエンゲキの練習をする
- ③ 友人を招いてエンカイを開く
- ④ エンソ系の漂白剤に漬ける
- ⑤ 自陣にエンゲンが到着する

17

C コウサク

- ① 喧嘩の勢いで友人とゼツコウする
- ② コウオツつけがたい試合だった
- ③ ケイコウ摂取が難しい患者
- ④ コウキ逸するべからず
- ⑤ 福利コウセイがしっかりした企業

18

D カツヤク

- ① ヤクバはいつも混雑している
- ② 裏舞台でアンヤクした政治家
- ③ 古くから伝わるヤクゼン料理
- ④ 多額のイヤクキンを支払う
- ⑤ ヤクドシなので神社でお祓いをする

19

E ショウガイ

- ① 寺院がショウシツしてしまう
- ② 階段を利用したショウコウ運動
- ③ 予算案がショウニンされる
- ④ ハンゲショウの時期は毎年蒸し暑い
- ⑤ クリスマスに讃美歌のガツショウをする

20

問二 傍線部 (a)・(b)・(c)・(d)・(e) の熟語の成り立ち方を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。なお、同じ番号を二回以上使ってもよい。

- ① 同じような意味の漢字を重ねたもの
- ② 反対または対応の意味を表す字を重ねたもの
- ③ 上の字が下の字を修飾しているもの
- ④ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの
- ⑤ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

(a) 希望

(b) 求婚

(c) 未完

(d) 悲恋

(e) 巧妙

問三 傍線部 (一) 「渋谷三郎との婚約の破棄がありました」とあるが、一葉と三郎の婚約破棄の理由として異なるものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 樋口家が三郎の出世を経済的に支えることができないほどに困窮していたため。
- ② たきが三郎の言動に腹を立てたため。
- ③ 則義が荷車請負業組合の事業に失敗したため。
- ④ 三郎が判事補として新潟に出向することが決まったため。

21	22	23	24	25
----	----	----	----	----

26

問四 空欄 ア に入る作品名を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

- ① 羅生門 ② 風の又三郎 ③ 坊ちゃん ④ たけくらべ ⑤ 高瀬舟

問五 傍線部（二）「二十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ」という、当時の流行した歌の文句を口ずさみますが、十七歳で父に死なれて人生の荒波に乗り出さなければならなかった一葉にとって、まさにこれは実感のこもった言葉だったでしょう。」とあるが、この文からわかる一葉の人生について適切なものを次の①～④から一つ選べ。

28

- ① 幼いころから非常に貧しく、許嫁の実家を頼るような生活をしていたが、父親の死によって許嫁から見捨てられたことを契機に、荒物屋を営むようになった。
- ② とても裕福な両親の一人娘として非常に大切に育てられたが、父親の死によって家督と借金を引継ぎ、婚約者とも死に別れ、明日の食事にも困るような生活を送ることになった。
- ③ 幼いころから和歌や文学に触れることができるほど、それなりに裕福な暮らしをしていたが、父親の死をきっかけに樋口家の女戸主となり、貧困に耐えながら作家としての才能を開花させた。
- ④ 士族の末裔として育てられた一葉は非常にプライドが高く、身の丈に合わない貴婦人のような暮らしをしていたが、小説の師である半井桃水に恋をし、着の身着のまま駆け落ちをし、落ちぶれていった。

問六 本文中に登場した一葉の作品「別れ霜」「十三夜」「花ごもり」「やみ夜」のうち二作品以上に共通する設定を、次の①～⑤から二つ選ぶ。

29

30

- ① 作中に登場する許嫁または幼なじみのうち、男性側が落ちぶれて人力車の車夫に堕ちている。
- ② 作中に登場する許嫁または幼なじみのうち、女性側両親のどちらかが許嫁または幼なじみの仲を引き裂こうと画策する。
- ③ 作中に登場する許嫁または幼なじみの家の折り合いが悪く対立をしている。
- ④ 作中に登場する許嫁または幼なじみのうち女性側の父親が、既に逝去もしくは作中にて死亡する。
- ⑤ 作中に登場する許嫁または幼なじみが、作品終盤で将来を悲観して無理心中を図ろうとする。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 一葉の作品の基調となっている「幼なじみの男女の恋のモチーフ」は、『伊勢物語』第二十三段から着想を得ている。
- ② 一葉は、渋谷三郎との婚約破棄に対し「この婚約話に心を引かれていたわけではない」と後の日記で語るように、影響を受けることはなかった。
- ③ 一葉が十七歳を迎えた際に起きた出来事として、渋谷三郎との婚約破棄およびそれを題材として描いた初めての作品「十三夜」の雑誌投稿がある。
- ④ 渋谷三郎は、検事に昇進したことにより、一葉を迎え入れる生活基盤が確立したが、病氣の一葉を嫁にすることを拒んだ三郎の母により、結婚話は無くなってしまった。